

持続可能なミライの学校づくり のための働き方改革



齋藤 敦子 氏

コクヨ株式会社ワークスタイル研究所
WORKSIGHT 主幹研究員

(プロフィール)
企業経営と働き方の視点でのワーク
プレイス構築と運営支援を専門とす
る。
未来の働き方と学び方を研究する
WORKSIGHT LABを立ち上げ、研究
から実際の現場をつなぐ活動を続け
ている。
文部科学省の学校業務改善アドバイ
ザーを務めた。

働き方を変えると生き方が変わる

私は2017年から3年間、文部科学省の学校業務改善アドバイザーを拝命していたことがきっかけで、北海道から九州まで全国でいくつかの学校を訪問させていただきました。先生方は過労死レベルの労働時間からは脱したいと、定時退勤日を設けて、声掛けや留守番電話を導入するなど、さまざまな取り組みをされています。最初は「無理だ」と思っている、学校の当たり前が社会の当たり前ではないことに気付く先生もいらっしゃいます。

熊本のある小学校の教頭先生にこう言われたことがあります。「自分が身体を壊してやっと気がついた。人生をもっと豊かに生きないといけない。」この先生はその後、教職員に働きかけ、アンケートツールを効果的に使いながら現場の声を聞き、学校の風景もがらりと変わりました。学校の働き方改革は、教職員にメリットがなければ長続きしません。アンケートでは先生方の気持ちバラバラであることもわかり、お互いに相談しやすい職員室へと変えていきました。学校で一番忙しい、ベテランの教頭先生が自ら働き方を変えることで、その先生にとっては生き方もずいぶん変わったようです。そして、先生ご自身が豊かに生きること、教育現場に新たな風もうまれます。

子どもがはじめて出会う「先生」という職業

日本は職業の流動性が低く、特に「先生」という職業はややクローズな世界にみえます。他方、教育への情熱やバイタリティを持ち、子どもたちと毎日会うことが本当に楽しいという先生も多いと思います。ただ、私が危惧しているのは、若い人たちの中で「先生になりたい」という人が減っていることです。少子化の影響もありますが、今、職業がずいぶんと変わってきていて、選択肢が増え、企業も人材獲得に力を注いでいます。働く・学ぶということが大きく変化しているなかで、「先生」という職業に魅力を感じてもらわなければなりません。

これまで訪問させていただいた学校のなかで、生徒と先生の距離が近くて、雰囲気がいいなあと感じたのは、校内が整理整頓されている一方で余白があり、カジュアルなコミュニケーションがとりやすい場づくりが行われていました。子どもたちがワクワクするような図書館や、ガラス張り、または壁のない職員室の学校もありました。オープンなラウンジのような空間で、気軽に声をかけることができる環境であれば信頼も生まれやすくなります。先生が楽しそうに、時には集中して仕事をしている姿を見ることで、子どもたちも「働く」ということを学びきっかけにもなるのではないのでしょうか。

ミライの学び場をデザインしよう

未来ではなく、ミライと片仮名で書くのは、もうお気づきかもしれませんが、既にもう起きていることだからです。そして、未来はやって来るものではなく、自分たちで創っていくものだと思います。昨今、熊本や岡山の学校では、生徒と教員が主体的に学校の環境をよりよくしていく活動に取り組んでいます。ある小学校では、高学年の子どもたちを中心に、低学年の後輩たちも使いやすいような環境づくりを行っています。校内を見てまわって、例えば図書館の棚の位置など、課題をふせんに書いて解決のアイデアを出していきます。ある中学校では、生徒会が中心となり、空き教室の有効活用に取り組みました。使われなくなった音楽室をサテライトスタジオに改装し、コロナ禍においても学校とのつながりを深める効果がありました。

私は環境デザインが専門ですが、これらは、今、世界でも注目されている「参加型デザイン」「ユーザー中心デザイン」にあたります。学校は標準化された建築パターンがあり、多くの学校が、40年前から教室も職員室も変わっていませんが、私たちの生活や「学びの在り方」は大きく変わっています。文部科学省では2022年3月に「新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方について」という報告書を発表しましたが、そこには「新しい時代の学び舎として創意工夫により特色・魅力を発揮」と記されています。創意工夫とは動的なものであり、環境づくりによって創造性も引き出されます。

環境を変えて 意識と行動を変える

それぞれの学校には歴史や地域の文化があります。そして、一度、学校を建ててしまったら、50年は同じ校舎を使わなければなりません。学校には地域のハブとしての役割と未来に向けた学び舎としての役割がありますが、後者は時代に合わせて変えていく必要があります。特に、AIなどのテクノロジーが進化し、人間は何を学ぶべきか、何のために働くのか、ということが問われている中で、教員も視野を広げ、対話していかなければなりません。働き方改革は長時間労働を削減することが目的ではなく、こうした時間を確保し令和の学校をつくっていくことが目的です。

最後にポイントを2つお伝えしたいと思います。ひとつは環境づくりです。環境は人の意識と行動を変える力があります。まずは、先生方が日々仕事をされている職員室を客観的に評価し、改善してみてください。その際、ただ雑然としているから片付けるのではなく、職員室は何をすることでいいのか、教育の目的・目標から考えてください。ふたつめは、前年踏襲をやめることです。行事や会議体などはその典型ですが、会議の際に紙の資料を配布するときも、デジタルの時代に紙は必要なのかということ問い直してみてください。とにかく、実験してみることが大切です。やってみて、問題があれば解決策を探っていく。「学び」のプロである先生方であればきっと出来るはず。それぞれの創意工夫を共有できる場も是非つくっていただければと思います。